

新たな扉が開かれる 1957（吉岡伝道所）

～ 仙台教会の歴史シリーズ その16～

小林孝男

仙台教会はいつ吉岡伝道所を設立したのでしょうか？結論から言えば、正確に断定することは難しいということになります。原因はその時代の仙台教会の一次資料が皆無に近いからです。伝道所設立は、吉岡に会堂を献堂し幼稚園を創立した1957年5月頃と考えるのが妥当なところでしょうが、母教会であるはずの仙台教会のこの件に関する情報が含まれる資料は、残念ながらほとんど発見できない状態です。

1957年といえば、仙台教会は誕生2年目ですので、まだまだ内部を整えることに勢力が注がれていた時期です。また、関谷定夫牧師から大沼上牧師へとバトンが渡された時期です。仙台教会には外に目を向けるだけの信仰的な余裕はまだ備わっておらず、吉岡伝道に関してはグラント宣教師と阿部利吉氏の熱意に委ねる、という状況だったのでしょう。そしてそのことが、後の時代に仙台教会と吉岡伝道所の間、微妙な距離感を生み出す遠因になったと考えるのは的外れでしょうか。

1. 二桁の受浸者

仙台教会の歴史を振り返ると、年間に二桁の受浸者があった年が11回あります¹。具体的には、幼稚園が開園し新会堂も建築された1954年23名、教会組織を行った1955年20名、翌1956年17名、吉岡伝道を開始した1957年16名。天野五郎牧師時代が始まった1964年11名、南光台伝道所を開設した1966年12名、1967年13名、1968年10名。金子純雄牧師時代に大富伝道所が発足した1992年10名、1993年13名、そして日本バプテスト連盟信徒大会に、仙台教会から青年伝道隊を派遣した1994年13名です。

二桁の受浸者を生み出した年の中の一つ、1956年の4月29日（日）に、仙台教会で6名の男子青年がバプテスマを受けました。現在会員の渡邊真人さん（当時17歳）や、藤沢良和さん（当時18歳）もそこに含まれます。今もお元気に教会生活を送られていますので、仙台教会初期時代の「歴史よもやま話」をお伺いする機会を設けるのも面白いでしょうし、有意義ではないでしょうか。さて、その6名の中のお一人が阿部信行さん（2003年7月24日召天）でした。

2. 吉岡伝道のきっかけー富谷での家庭礼拝

阿部信行さんは富谷の方ですが、仙台で学生生活を送る中で仙台教会に導かれ、バプテスマを受けた方です。真面目な信仰生活は、普段の生活態度にも良い影響を与えたようです。このことに感激した母の阿部花子さんは、1956年のある日、仙台教会の礼拝に出席され、礼拝後に関谷定夫牧師とグラント宣教師に面談を申し出られました。そして信行さんに深く心を寄せ、お世話や指導を行っていた関谷牧師とグラント宣教師へ、感謝の思いを伝えると同時にこんな申し出をされたのです。「関谷先生とグラント先生がわが家で礼拝を行うことは出来ないでしょうか？ 私たちの近くには教会が全くないのです」²。

花子さんはクリスチャンではありませんでしたが、キリスト教に大変興味を持っておられました。またご主人の阿部利吉さんは、富谷の自宅で開業しておられた医師で、中学時代³にキリストを信じる信仰に導かれたものの、その後はアクティブな信仰生活は送っていなかったようです。しかし、キリスト教には強いシンパシーを抱いていました。息子さんのバプテスマをきっかけに、信仰の灯が再び明々と輝き出し、家庭礼拝の申し出に繋がったのではないかと想像します。

グラント宣教師と関谷牧師は、これは自分たちが祈り求めてきたことに主がお応えくださり、新しい働きの方を示して下さったのだと確信し、喜んでその申し出に応じることにします。最初の訪問の際は、あまりもの悪路で車の車軸まで泥に埋まり、近所の農家をお願いし馬で車を引き出してもらい、ようやく富谷の阿部宅にたどり着いたということです。二回三回と家庭礼拝を続ける中で、阿部夫妻は患者さんやご近所の方にも主を証しして、人々を集会へ招くようになりました⁴。

二ヶ月ほど家庭礼拝を続けた後、利吉さんは近隣の大きな町である吉岡に病院を移転させることとなりますが、富谷の阿部宅で行ってきた集会も吉岡に移動し継続することを望んでいました⁵。当時吉岡の人口は2万人以上あったようですが、これまで一度もキリスト教の宣教が行われたことのない町でした。「主が自分たちを吉岡の人々のところに遣わそうとしておられる」ということを確信したグラント宣教師と関谷牧師にとって、利吉さんの希望を叶えることは、イコール主のご計画に従うことそのものでした。

3. 吉岡での集会開始

吉岡に新病院が開設されたのは1957年2月頃の様子です。その開所式で阿部利吉さんは病院長として挨拶のスピーチを行います。その内容はクリスチャンとしての力強い証し以外の何ものでもありませんでした。普通に考えれば場違いな挨拶ということになりますが、一人のクリスチャンの医者として、吉岡に開設した新病院の役割と使命を明確にしたのです。次のような内容でした。

「大戦中、私はオランダをはじめとする、様々な国の兵士が収容されていたジャワ島の捕虜収容所で働いていました。捕虜が何よりも必要としている薬を入手するため、私は最善を尽くしました。時には足りない貴重な物資を密輸することさえありました。そのため私は懲戒を受け、昇進の望みがなくなりました。軍籍を離れた時、私の階級は入隊時と同じだったのです。私はクリスチャンだったので、助けを必要とするすべての者を助けたかったのです。私は皆様が私を必要とする時、いつでも、どこでも、助けるために吉岡に来たのです」⁶。

新病院での礼拝は、毎週病院の小さな待合室で行われました。ただ病院の業務が拡大し患者の数も増えるとともに、待合室には常に人が出入りするようになったため、どうしても集会のための別な建物が必要となり、そのことを覚え祈り始めました。そしてその祈りを主はお聞き届けくださり、病院の近くの土地の所有者が、教会が吉岡での日曜学校や幼稚園開設にも関心を抱いていることを知ると、特別割引価格を提示してくれたのです。また仙台に駐留していた米軍の中の小さなバプテストのグループは、教会の特別な事業のために500ドルの献金を約束してくれていたため、その資金と仙台教会の資金と合わせて土地を購入することができました。会堂は駐留軍の建物を改造・移設することとし、その費用のやりくりには閉鎖間近の駐留軍に残っていた最後のバプテスト信者ヘンリー・フケイ准尉（愛称ハンク）とその奥様が、献身的な協力をしてくださいました⁷。またハンクの司令官は、駐留軍の活動縮小に伴って発生する余剰備品を、キリスト教団体に払い下げることができるよう取り計らい、補給担当役であったハンクは、バプテストへの払い下げに関して大いに便宜を図ってくれました⁸。

このようにして1957年5月に吉岡に会堂が与えられ、幼稚園が開設され、そこをベースとして吉岡伝道が本格化していくこととなります。そして阿部利吉・花子夫妻は、1958年10月5日に受浸する運びとなります⁹。

4. 無医村地区での医療伝道の試み

仙台教会の古い週報に目を通していた時、吉岡伝道に関するある記事が目に残りました。それは1964年5月24日の週報です¹⁰。報告欄に次のように書かれています。

「今日の礼拝后（2時～5時）吉岡近在の無医村・嘉太神地区の人々のために、第一回医療伝道を行います。これは、阿部兄・吉永兄らの発意と協力による愛のわざであって、阿部夫人、牧師の他、乗車人員の関係で、今回は下記に見られる諸兄弟に限られることになりましたが、今後のためにもぜひこのために御加禱をおねがいいたします。

診療 阿部利吉兄（医師）、吉永馨兄（医師）、児玉茂美兄（医学生）

看護 阿部姉、斎藤民子姉（看護学生）、菊田瑠美姉（大学生）

顧問 鎌田栄子姉（園教諭）、天野牧師」

その後何回継続したのかは、残念ながら週報で確認することは出来ませんでした。仙台教会が無医村での医療伝道に携わった歴史を持つことに、大いに感銘を受けました。このことも吉岡伝道史のひとつコマとして、忘れずに語り伝えていきたいものです。

¹ 年毎の受浸者数は「日本バプテスト仙台基督教会歴史年表の原表」参照

² 『主の息吹の中で』68～69頁

³ 資料(1987/11/15_東北学院時報 445号_阿部利吉逝去)、東北学院中学部出身

⁴ 『主の息吹の中で』69頁。また、資料(2011/05/01_記念誌・ねむの木に寄せて_抜粋) 32～33頁に、大槻国彦師(志免バプテスト教会名誉牧師)がまだ少年の頃、急病で倒れた祖父のために、鶴巣から馬をひいて富谷の阿部利吉医師宅まで往診をお願いに行ったエピソードが書かれている。

⁵ 『主の息吹の中で』69頁

⁶ 同上 71頁

⁷ 『主の息吹の中で』74～75頁

⁸ 『主の息吹の中で』76頁。遊具一式、折りたたみ椅子 60脚、子供用の椅子とテーブル、ピアノ、小さな講壇等。尚、仙台の駐留軍は1957年11月までに完全に撤退した。

⁹ 『主の息吹の中で』69頁には「二人は数カ月後に共にバプテスマを受け・・・」と記載されている。富谷での家庭礼拝開始後「数か月後」ということは、1956年後半あるいは1957年初めということになる。仙台教会の教籍記録と異なっている。ここでは教籍記録に従う。

¹⁰ 週報(1964/05/24)